

## 日本人公墓と 731 細菌部隊記念館を訪ね、改めて戦争を考える

高橋 修司

1月に、「中国『帰国者』家族とともに歩む練馬の会」(同歩会)主催の映画「嗚呼 満蒙開拓団」(羽田澄子監督)を観た。その時、今回、訪問ツアーの世話役をされた「方正(ほうまさ)友好交流の会」の奥村正雄さんから背景説明を受けた。中国ハルピン市郊外の方正県に5000人近い死者たちを葬る『日本人公墓』が存在していることを知りツアーに参加した。

この「方正地区日本人公墓」建立の経過は以下のとおりである。もともと中国の土地であった旧満州に国策として入り込んだ開拓民は、ソ連の参戦、それに続く敗戦の知らせと同時に祖国を目指して逃げ惑い、難民、流浪の民と化した。多くの人々は零下40度という酷寒にさらされ、飢えと栄養失調、発疹チフスなどによってこの方正の地で息絶えた。そして、生き残った人から残留「婦人」、孤児が大量に発生したのである。それから数年、累々たる白骨の山を見たある残留「婦人」は、何とかして骨を拾って埋葬したいと願った。その願いは最終的には当時の周恩来首相のもとまで届き、建立が許可された。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、日中が国交を回復する10年ほど前のことである。まだ貧しかった中国がお金を出し、公墓を建立し、長年にわたって維持管理している。

6月24日、方正県政府を表敬訪問し、「中日友好園林」に向かった。そこには、他に、大量自決があった「麻山地区日本人公墓」、「中国養父母公墓」、稲作を指導した「藤原長作記念碑」、友好の記念碑、墓参記念植樹林、記念館が整然とあった。藤原さんという人は中国に何年間も手弁当で訪れ、稲作技術を伝授し、「日中友好水稻王」と感謝、尊敬されている。養父母公墓は孤児だった日本人が建立したもので、テレビでも放映された小説「大地の子」(山崎豊子著)の「養父」のような人がたくさんいたことがわかる。少し、救われた気持ちになった。涼しい風のなか、様々な思いを巡らせながらお参りした。

「731 細菌部隊記念館」を訪れたのは26日、37度と一番暑い日だった。

「731 部隊」は細菌戦を行う特殊部隊でハルピンを中心に開発と実験を行った。資料によれば10年間に少なくとも3000余のロシア人、朝鮮人を含む人々が生体実験により殺害され、中国全土で行われた細菌戦でたくさんの方が亡くなり、不発細菌爆弾のためなどで現在も被害が続いている。敗戦の際に、関係者が米軍に実験資料を提供して訴追を免れたことは非公然の事実として有名である。

「悪魔の飽食」(森村誠一著)が出版されたとき大変な衝撃と反響が起きたが、残された本部建物の陳列品、破壊から残った煙突、生きて戻れなかったと言われる地下通路と判明している犠牲者の写真・名札を見ると、事実だったろうと思うし、「世界遺産」への登録の手続きが進んでいると聞き、「原爆ドーム」、「アウシュビッツ」と考え合わせ、意義あることと思わざるを得ないと思った。

戦争は終わった後も人々に影響を残す。今回の方正訪問は残留孤児の聞き取り調査もあった。調査に当たった方々によれば周りの中国人も孤児だったと言っているのに物的証拠がないため日本政府から認められていないとのこと。この女性はすでに子供のみならず孫もりっぱに育ってい

るが、日本人と認定されることが宙ぶらりんな状態を解消し、本人、家族とも精神的に安定することになると話しているとのこと。私もそう思う。

映画にインタビューで出演し、満州で母と妹をなくした方は回数を忘れるほど中国東北地方を訪ね、現地の中国人と交流しているとのこと。帰ったらすぐ獣医の仕事が待っていると笑っていた。

ハルピンで生まれ、兄と弟をなくした女性は、ハルピン訪問を永年希望していたとのこと。95歳で亡くなった父の波乱万丈の人生や、自分も孤児になった可能性があったと言う話が興味深くリアルに受けとめられた。兄弟のお墓探しでは特定できなかったが、猛暑のなか、日本から持参した水をまく姿が印象深く残っている。

最近、中国の「膨張」につれて、私たち日本人の中にも複雑な感情が沸き起こっている。屈折したナショナリズムは危険だ。今回、あらためて「過去から教訓を学び、これからは生かす」大切さを感じ取った。

(たかはし・しゅうじ：東京都練馬区職員労働組合顧問、59歳。定年後は中国で古代史を勉強したいと、いま中国語を学習中)